燈下の墨すり

玉乃枝

巻一

へ13
1455
2

門へ遠 13
帙 14455
巻 2

田谷

燈下戯墨玉之枝巻二

東都　森羅子　著

○小夜衣

去ば清女が筆ずさみ。遠くて近きものゝ。男女乃中なりとゝ。縁ゝ千古の確言なるかゝ。紅紫ふる乳。紅粉を顔し言葉。御溝の水くかゞたりもゝんを。ゝよ男れまにつゝ多へく。遠ゝ妹背のちぎりを紙ゝたりといふ見ぬ唐土れ故事弧。虚言なりといひくゝんゝ。亀甚のまざりん男の俳云ゝ。出雲の神れ縁さぐゝ。鹿島の社れ常陸苔。月下老人の

赤き瀧と凡夫のたゝり初べきふあらば。さぐ海の妹背の中なふをや。叔母も室町ハ。彼乾書法返さんと思ふ同り。たゝ無くも与こいゆりけ上べ人のとゞめもかゞなうと。其海く多箱れ中人入。跡形として形ありし。忘上んとおりふ面影ハ。同ふ凡ふ離上べたちおひられば。ゆりや戸口ふられ出。文の其鶏ふ変せぞ。ちらべ樓上法見あゞれば。伊藤蛋の深ふと。ふ上なわの紙紬れ。凡諸べふを投つをゝう。ふ上海書が入湯の間ふうべ。大泳たが投たうとを知べ。おゞ法りの紙の中ふ凡入。亭にめどうて抜きふ上べと見こうと書たう。爲ふの薫りいと香だゝくおゆほふに。心ときめ凡。一ふ

さゝうふ酔ふかゝとく。与こがうふ文を凡生て。抜きふ上ふ。粉なうねふを。おゞしゝぐゞふ。法ゝ法の ほどのゝゞけふ紙。同れあゝふ夢ふ上まりゝ。ふゝふなん。伊藤守ハ。法凡事法て。ふゝひゝふの法ふめれば。変なゝ凡月の美生ゝ法。花蜜のきゝ戸ふゝ。去のびふ人。中ゞゝれやどゝなうねゞ。かりを凡ふの凡。抜りふ夜を一夜乃法物ゝう。法ゝ法ふ物。おりふたま人法ゝ。ふ去して此清臭まゝゝとゝ。きふ入ゝう。法ほゞうなん。杉のゝふ凡れゝ。あゝふ凡みゞゝつくさ

ほうしう。まのこゝあはれ。ゆくすえ。
と書たるこゝろぐるの跡。猶紛れ無まよといさゝか遠ざかる。
叡山世者こゝ。ゆくりなくいなりしと。大ふよりはるばる。伊与
守とゝ大弘をゞ事。小忠とい与三をいふまじ。家こゝ
ろ操をゆゞ紙。変せくれ者よたゝ人なる。源氏物語乃
琴のむふく。えゆ。又ゆくさに書こゝろ。こゝ出しこゝ西行
法師ゞ求来かしの。梅花こゝ。ゆれむにより勢て。今宵ゆるゝ。
来よかしとゝ。度同ある事。こゝ式まこゝ。あるこゝ
なつと。容儀とゝ。才智といひ。かゝる人と一夜のまくら
をゝいさん事。世の外れ毋りひ出なりと。又も紛も

身ゆひき去め。日れくゝを抜ぐ待居なり。案のおとく年
の夏。姉くこゝよりと。ま祥ゞ旅宿ゝ。めくく。八ゝぐ新
ゆふを。ゆれゞ。大弘ゝ紙ゝ。ゆ結よ抜こゝひゆくゝ。下人
ゆ紙事かき物せざんざめて。こゝ出ゝゞ。こゝ
美堂一人こゝ。門ゞちよゝ高聲ゆふ。やゝく接内後
やゝ中紙ゞ。ゆよりゆでより雑波のこゝれ濱遊遊し
こゝ。ゆくせゆ。三ゝれ伊道守のあゝゞ。盛紙の要ゝ。
火のえをゝ。こゝ紙法書よゆ。厨の作ゝれこゝ。構へ
こゝ法ゆあゞくゝと。云ゝ。こゝ。こゝ。重行りし学て。
ん物ゝく。紙寶をゝゞ物盗人いゞ知ゞ。花をぬすむ

盃紙い。物せぐにも術なうあべしと。一日三秋れるひ
みく。待こ待こ待もひさしけと。潮み初夜もすぎ。二更
の後み絢とぐ待さ。天にんでまると比み援はして。花冥を
れ紫折戸にもをさめれば。素ふよると虚寂なうれば。み
み寒ぐひて冥くにで。室紙うみしく絢あぐ抱巳。
源雪が源情。めくはで切ぐれあう紙感ぐめとり
勝もい能知う。小殊しれの戸扉を明。ぜろうくと
思び入り。何とゆうんをれ。ゆうんとすふみはをは
ぜ。寒みくゆ出んとはるはりやに。僧ふい盤れあり花
寒ぐ。漉洋とくぐうと待みはべ。美くく朝ー多美

蒙ととすい盃紙こて入れんなれとばうくと物合有
こ代いさぐ打擲ー。あく縄をとりて高み小多紙綑け
はぶ。寒鼎者痛み堪ねく。人くく弥示せられる。我を盃
紙の中ぐひみあべ。縄貝をゆる男とさけびれば。格
内いみ多うまづあうを照して。ちみつが新を見よ。蹴
燭紙ものち出。寒鼎ぐ面拝を見ぎちぐ物ど待きたふ
新色みく。さいいに和まい白ひの人よあるぐや。今育
を天大孫寒の面字をうかひ。思び入ふこ和こ不欲
なれ拍一つれねされれば穏便みたくひたれど。殿の沸
さーつあたうちぐ。つくーに見通ーぐ。定房ーうちさく

張番せよと云ふく是が下紙ぐも立かゝると。引たてんと
をもふ抱き給。源雪はつまを立出。抱さんゞゝきい作事
おぢやと問ゝれば。捨肉をゝみよりて。此石とりたる縄付を。
むうひの草れ旅人なるがら人の浮屠を代又さゝみ思
ひ入ゝるが曲をのゆゑ。法筑れごゝかゝめ盃。実貫公法
四人ゝれう人。色もかくををうゝんため。取さゝををにはあり。
特れ引きてよをを下知をれが。たゝ鼠の紙ゞとせりあふを
ぼゝみ。懐中よりゝゞんの勢書ゝ。焼くさゝ紙取抱ゝ
源雪目をゝゝ徳め。捨肉其ゝふわらはみ見せをきいゝ。
をかいちゝれてゝ出ゝを。れあはげゝゝゝきゝ出ゝ。大源

去れ多源よ法ゞれ医。抱ハ例のわふ業あゝく。此差さ人
を抱ゝふゝ。紙ゝあゝえて抱ゝひふせんとの事なる
爲ゝと。をゝも云ゝ。重行が債ふあちよをを。さとゞ紙和
らを。此状と此妻くさハ。推人れくよゝを。抱ゝを法いゝせた
ふやゝきゝゝあゝゝさゝをいゝが。重行源雪が面色事部ふ
て。抱を此事いゝゝなる事ゝとハ。をゝ法ゝとゝいまちゝ
せんゝゝをなゝれバん中ふ抱ゝふ取ゝ。我一附の不幸ふく。
ゝふ抱ゝ猿ふ縄ゝ。盗賊の汚名をかゝむふ事。此身
の不運といひふゝ。假ふと邪淫我侵さんとせゝ。天罰
遁をね不なゝゝ此財宜ふ欲ゝふ上ハ。此婦人よ財ゝく

実情成演。いとだよく死み涙ぐ〜と兄郎をきらわ。
涙雪をとひ抜あたるちぐめよると。与三が数書状奪え。
高くめくうるとよると。袖絡を投たり事までは。まびうに
かつうぢぐめよりうる係り。けなうんとふ寿せうど。笑も
や此年実情ならば。一夜のおさけみ百とせれ命を失ふ
ととと一脇ふまぐと。搖ぬくくも恋び入〜。身い煩悩のたり
もはとう。涙まーき此をぐうる。少〜ふあつれを恋びと。
潜絡みなみぐ紙おぐくれば。涙雪いただうれ執ん代
ちぐめく安き。惕〜くうるとくとも。心よ抜ちえく接内み
もうひ。此二尻の多せたい其方も実めくくえ知あうん殿

の筆れ踏ふ涙ぐれおうくれば。例のつふ業にお遠なー。
たをれば此ちのふいわ代紙き。ふ〜まいうせておいいば。
接内一紙がそんせたまちそ女性のおうぐめ絡きぐ。
ううひと申ぐものなり。ぜひとと殿の涙ふ入ますで。抜
ちえ抜ちんと立ちれば。涙雪いうれふ智吉おく。みぐ
かうがちとぐ代のちひぞい。其方みと落なありといべ。
接内居ぐけたうみなう。ちいめぐしき事を取ふ抜
うふ素がをちどうけたる女ぐうんといべ。れぐよ。ふぐう
後の涙内みく景というる其方。涙袖ちぐ代あぐうふ
ぐう花雪の切戸みぐ接も抜ちぐ此間の勇戸よ遠

玉之枝巻二

も掛さる沙汰よと。化不の人は是をと。入ふ有ふ
ぞや。扨ちぐいよい世事なうと。いひ伽らせ。云句も出
ぬ冥ほせ。敷のくらせ迄ふよ上あく。申沢へうづうらが
掏ふあり。其方へちれたとづ偽をと。多ぼうら定彩
ど縄をとられ花屋をのくさよりひそうふかつらせ。格内よ
命しと疫を作させ。石紙去めさ芳。用心のこるかうこと
なく。其身も国ふ入くぬとう疫をけて。此海者といふ
ち。元来神ざれの拵去なしぶ。ほとあれ舟あとと居土
の賣油郎ぜごられ貌き紙紛。なさけをぬられ人あう
ていみぶうに扨びを紙ぬど。ちろびよ法とふ紙いん。

言語あぢひなく容貌見あくれ田舎人ぶの来りし
とれい中殊ふして病気と称ぶいのや安鼎にく殊紙く
病めれど。ととよると海者うぶ名紙ゆつえ若ひ来且
ふ家なれば。色かく其殊の扨さぬうつぜ。たそいきくかん
事よると拘いひを法まもちふあい差物をうちゆぶう。殊安を
被邦ちふふ動うけ上び死車もされをのそあつくひ。此春
のこ病大泳ちと去めくあらせ。文百あれ金子を得。不勤お
ふ少鞆買ふ法らうとあざむれ轄ふうち茶せこま祥の座
しきえ扨うたふなう泳者ふ大泳たがつもひくぶも。教
蕩不粧の悪少年なれば。つ上きくのく持なせくぶ。かくた

たゝうれく。大坂の中へ打ち入うゑをゝゆみ。其日よりを。屋
まひと称じあく〳〵大坂をゝみ物をひ燈〳〵せば。実貴いゑを
出ゝう源吾ゞ乞まつふめぐ。俗病とい紛つゝもせ角うべ玉
をゝゝう〳〵かうんと。遥王の燈火ならねど。百灯を焚つゝそ
ん仏とれどを。そゝくうれ角つきゝもなられば。此宵三人
出集せまに奥〳〵たるなり。見い物物ゝ。大坂をゞ往よう
南ゝぐゝ。左ゝ郎をあぐむくたゝうたとなれば。ちうれこそう
み一宿〳〵。ちゞめくたゝうこゝれだゝく。志を角〳〵たゝうんと。
羽之朝たちかうて。やうゝ成間ゞ。稽肉夜せんの志ゞいを有
のまゝにつゞふみを。実貴よいれどゝりゆゞく源ゆれを

よび出〳〵。なみゆ人盗物ゝ。なたをけう人せ〳〵やと。数あゝ
らうみいひれゞ。源吾をゝゝと物ゝうゞ。ゝぐんれ二郎
を元出〳〵。人の家み志のび入ものゝ罷とゝびき〳〵角
志のび入をふのゝ罷とゝ。いづ見成物〳〵と志角ゝや。同
罷のゝれなゝ角ゞ〳〵。此俤ゝ文と紙紙みゝく志ゝ物なれ人
を物〳〵なゝ。ゝくひを有たまふ源ゞれを厳ゝよれ志ゝく
物ゞをゝゝ。自然み此事人ほふ家ゞ人のゝのいひさゞか
き世の中門風れ角ゞ〳〵。ゝゝゞ〳〵物〳〵成まぬうれ玉
ゝゞ。ゝゝとなれ名成ゝゝれゝく。ゝゞゝゝの殺よ入ん
事。ゝゝゝ厳のゝ仙なゝゞやさふにとゝく主彩ゞのと

ゆうんをたゝかひ。ぬんびんみ事をたゝうひ〜ぬ。れちゝ
ぐゝをたゝかふならべ耳んしてみをうくべ〜とおとべよゝ
はせいひれば。大ふたゝん言句も出ぬ。おきうあうをね
めまう〜。彼文の文〜ゆうを法ゝうたゝふ差當と取つぬ〜
ゑふゝ与三と紙よび出〜。物の生づうがせんなれ事をゑ
ふゝたるゆ人。おれげ〜みゝ門風れ出〜かうざふそ〜つ紙文
させ。源雪みをいるづうめく名成物ふせんとせ〜事出
おとぐれなれ指肉を頭みゝあうぐねれ男をかゝむう。順
みゝ胡麻塩の八束髭をたゝ〜なぐう。蔦守を物ろおき
うに成〜たふ義疫。今見いゆ生はうぐ。後見紙きつと

はゝ〜もべ〜と。ぬをたくおとくたうう法をおくれ図いう
ゝれば鼎堂ごとゝ歌ふんあいせうと病みいかゝれねとゝ。
古人の金言もべなふ敬と若矣ひ〜て注成ゑちけふ。
源雪ゝ其まくたうどのみあぐう重行が昭夜れぬうまひ。
氣ゆ人ふゝ〜ゝ物央の中へも入んと物ひ出ぐふ志ぐつの
ちゝ法ざ〜といひ生ゝちれ宗雅ある事いめ人の生五
平仲みをは法うぬ〜と物りふり法書。家絶身をま
くをふゝ。此人の外なゝと。物りひおをあそれよう法ゝ定
要成いとふちゝ。日ご法みゝ百だん〜欠食も志ぐいみ減
〜。相恩作幣の意病となゝ。せ先く志鼎が物りげ

なんとことえんはうくだらどのくとよとちなどむとど。宝物
ゐ世ほとれ一件を。ゆく孤くゐ弥生せ係び其ゆひ家。源
ゆれ今ゐ物ひみせ多う血をおりてみをおゆゆ。白
うねの紋みむをび付ちうちをきゐゆく宝ゆれが亭宝
うをさえくかげこみうゆ出るとゆわらゐ内。大泳おがすゐ
物れ間ぢくきおえれば。ち係の鬼れ物ろ係しく。己
ゐ邪百入みけゐ。源多ぶころや通ぢきん宝行い延屋
のあゆりいつになくえをよたちいぐ義歩すゐり。物ぎ
や紋みはいうゐりのあとろなのげられば。源ゆれが血を紋
て書たゐゐ物ゐりはゆ（みゆひとなり）。物りひれうけ

をなみだちぐくだりにうれくさ。おのびあうんみ
づひをけ多ぐりかゐ書ゐ弥見。あつりのみ懲ゐく作
たゐをゆとゆうんいゐゐごとく。おぐれ物とゐ紋宝
行ゐ物りれみ怒り。此行はにぐく犬の孤ぢく物あ
ゆえ半紋上。ほゐも飽見ゐぐりてゆゐ係重ゐ紋ゐげこ
み。ゆゐびちぐをあゐんとだくむ紋ゆ怪なれと。其
ま大泳おが宿百入たちうん宝ほうよ射して云ゆう
物れぐえうゆ多と仇なゐ。みれ言ゐ。ゆあって
又ひはは百多ぐはおゐ。えんとんせゐゐく。や。返答よ
ゐうく物いたく物ぐと。弱りゆゐうゐ係げ治をれば宝

貫太みぎゆうてんし先夜の事ハ悪党どもが一味の
私與よりおこりて和殿をころし金をうばひ今日の事ま
おおくハいづれもあひはからひしと云バ夫婦いかりてかの
かんざしを血みどろに抜ければ此二しなを見せつつお長と
云バ貫太かんざしをとりて先づ抜ど深き。擲ぶんの身
を讀ふちよりて顔をよく土のごとくなり朱のごとくなりぬ。
蠱の毒喰せしが身を慄りて二子をしつつ遂に引
目をとぢけぞ。抑くれ阿へかけ入しが折ちかくの棺喜女の
なく勢手にとるがごとく申ゆゑバ室町さてみとた先
らふ内。定ほら羅刹のあらそふごとく極楽踏みて

おゆみ生椿肉を呼出し。みつから淫雪めが始まりひ。
其分にさしをれがし。拝ざれれ小百合の長が。めとく人抱く
生き身の代は百金れ肉をは情ぐの分をおへえ。
即日残金を取たて来れ。女のハあんだふ始らみ玩
室れ切たより出しやりたり。ちやうく急げと追立出ま。
抑顔色紙座りつげく。夫婦みむりひ今日のみの石仕
の女めが不知為なるゆゑ。只今いとみを殺りたまへバ足下
みと云ふハあるまじと云バ室町が心中刀をぬつて割
がごとく悔の心やるひくわれども今さらかへらぬ事
なれバたわらね侍よ寺をぶを正し郭内白ふ乱ひ

年の上に申(ぐん)いさゝかもとゞ(れ)なしゝ。為(ためし)代〳〵あこゝ
ゆゝ事か。

燈下戯墨玉之枝巻二